

未来を担うサッカー日本女子代表の育成に関する研究

A study on the training support for Japan women's national football team bearing the future

1K10C358 福沢真菜美

主査 吉永武史 先生

副査 広瀬統一 先生

【序 章】

<研究の動機・目的>

平成 23 年のサッカー女子ワールドカップドイツ大会において、日本女子代表の「なでしこジャパン」が初の世界一に輝いた。このなでしこフィーバーによって競技人口は増えつつあるものの、女子サッカーの環境はまだ十分には整備されていない。特に女子チームの少なさから、小学生から中学生へ上がる際に受け皿がなく、諦めてしまうケースが多くみられる。よって、この育成年代の環境を整え、将来なでしこジャパンの一員として日本の女子サッカーを引っ張っていけるような逸材を育てていくことが必要である。そこで本研究では、女子の育成年代の子がサッカーをできる環境をどのように整備するかについて検討することにした。また、日本の女子サッカー育成システムを視野に入れながら、育成年代の在り方を検討し、さらに世界ランク上位国のアメリカの育成システムの取り組み方を我が国と比較することで、日本の育成システムを今後どうすべきなのかを明らかにしようとした。

<研究の方法>

女子サッカーに関連した資料やインターネットの情報による理論研究で進めていった。そして、世界ランク上位のアメリカの育成システムと我が国の育成システムを比較しながら、未来のサッカー日本女子代表の育成にどう力を入れるべきなのか、どのような環境を作るべきなのか、その方策について検討した。

また、W大学の女子サッカー部 33 名にアンケート調査を実施し、その結果より今後の日本女子代表選手の育成の在り方について考えた。

【第 1 章】

第 1 章では、女子サッカーの変遷から発展について検討した。サッカー女子日本代表は、たくさんの困難を乗り越えながらも数々の大会に出場し、確実に力をつけ日本の女子サッカーの認知度を上げていったことがわかった。しかし現在、日本の中学校が 10,628 校あるなかで、女子サッカー部がある中学校は 660 校だけであった。育成年代の受け皿がないということが問題として上がるのはこの結果からも明らかであった。

【第 2 章】

第 2 章では、W大学の女子サッカー部 33 名にアンケー

トを実施した。その結果、女子サッカーの環境が整っていないことが課題として明確に浮かび上がった。また、男子と一緒にサッカーをすることは実際に経験してみても困った点があったが、男子の中で一緒にプレーすることで高いレベルの中でサッカーができるため、良い刺激になると考えている人が多いことも明らかになった。

【第 3 章】

第 3 章では、女子サッカーの環境づくりと選手育成システムの確立について検討した。日本では育成年代の環境が問題となっている。しかし問題は練習環境だけにとどまらず、指導者不足も問題になっていた。

現在、日本では選手の育成システムとして、「トレセン制度」や「なでしこチャレンジプロジェクト」、「スーパー少女プロジェクト」などの育成制度が設けられている。さらに、JFA アカデミー福島といった日本のサッカー育成に力を入れている学校もある。今後は、このようなサッカーの拠点が徐々に成果を出し、さらに全国に拡大していくことが求められると考える。

女子サッカーの人口が約 44,000 人の日本と比べ、アメリカでは約 130 万人がサッカー協会に登録している。未登録者まで含めると約 1 千万人を超すとも言われている。このように女子サッカーが人気のアメリカと、W 杯で優勝した日本の環境はどういった点が異なっているのかについて比較した。その結果、日本では狭い練習場でトレーニングしているということから、環境が整っているアメリカよりも足元の技術が身に付く環境が整っているという示唆が得られた。

【結章】

小学生の時期に男子と一緒にサッカーができる環境はアメリカにはないことであり、それが日本の女子サッカーの強みであるということが明らかとなった。したがって、小学校では男子と一緒にサッカーができる環境を作り、技能を高めることが大切であるといえる。また、小学校で身に付けた技術を発揮できるようなチームを作り、受け皿を増やすことも重要である。そして、高校やなでしこリーグのチーム、その下部組織であるチームがしっかりと育成年代の受け入れ態勢を作り、将来有望な選手を育てていくことが必要である。